

日本会計研究学会
スタディ・グループ最終報告書

わが国における女性会計学者の現状と課題

2016年9月12日

日本会計研究学会 第75回大会（於 静岡）

日本会計研究学会
スタディ・グループ報告
わが国における女性会計学者の現状と課題

<最終報告>

2016年9月12日

【研究グループメンバー】

主査	北村 敬子 (中央大学)
委員	井原 理代 (高松大学)
	小津 稚加子 (九州大学)
	木村 麻子 (関西大学)
	阪 智香 (関西学院大学)
	佐々木 郁子 (東北学院大学)
	澤登 千恵 (大阪産業大学)
	田中 優希 (法政大学)
	津村 怜花 (高松大学)
	西村 三保子 (明治学院大学)
	西村 優子 (青山学院大学)
	挽 文子 (一橋大学)
	兵頭 和花子 (兵庫県立大学)
	堀江 優子 (明星大学)
	宮本 京子 (関西大学)
研究協力者	石川 恵子 (日本大学)
	高田 知実 (神戸大学)
	辻山 栄子 (早稲田大学)
	山内 暁 (早稲田大学)
	丸岡 恵梨子 (中央大学)

はしがき

本研究は、多様な視点から、わが国の女性会計研究者の現状と課題を明らかにすることを目的とする。しかし、その分析は、あくまでも女性会計研究者の研究面を中心とする。ここに、女性会計研究者の定義が問題となる。本報告書で取り上げる女性会計研究者は、日本会計研究学会に入会している女性に限られる。入会者に限定してしまうと、企業内部や非営利団体において研究を行っている研究者が漏れてしまう可能性があるが、学会に入っていない研究者を把握する術をもたないわれわれにとっては、ひとつの範囲として日本会計研究学会入会者を対象とする以外になかったというのが現実である。したがって、学会入会者であれば、院生も留学生も女性会計研究者に含めて処理される。スタディ・グループの当初申請時のテーマとして掲げていた女性会計学者よりも、女性会計研究者の方が広い範囲を網羅しているため、以下本報告書においては女性会計研究者を対象とする。しかし、日本会計研究学会の名簿には、ご存じのように、男性、女性の区別がない。昨年の学会誌には、2015年3月31日現在において、全体で1,837名の会員が存在することが明らかにされているが、この中から女性を選び出すことは並大抵の苦勞ではない。それでも271名の女性をピックアップすることができた。女性研究者比率は14.75%である。しかしこの数字が正確かと問われれば、はなはだ心許なく、多少はここに入っていない女性がいるかもしれない。お許しいただきたい。

本研究メンバーは、世代の異なる女性会計研究者20名より成る。また、その専門領域も、財務会計、管理会計、監査、環境会計、公会計、非営利組織の会計、それに会計史と幅広く、横断的であり、またその研究スタイルも、理論研究、実証研究、事例研究、歴史研究と多様かつ網羅的である。研究対象が女性であるからといって、その分析者が女性だけである必要性は存在しないのであるが、一昨年の9月にスタディ・グループを立ち上げてから今日に至るまで、男性からの希望は一人もなかったというのが現実である。それならば女性の視点で、なおかつ女性の立場を理解した上で、対象を女性研究者に限定した研究を行おうとしたのが、本スタディ・グループによる研究成果である。集まった20人の女性研究者は、自らの得意とする領域を、それぞれの研究方法を駆使して、積極的に女性会計研究者の研究に取り組んだ。なお、このスタディ・グループの研究に対しては、2015-17年の科研費基盤研究B（「日本の女性会計研究者の現状と課題に関する理論的・実証的研究－歴史を踏まえて－」（課題番号15H03399））の支援を受けている。さらに来年には、この最終報告書に磨きをかけて、その成果を世に問いたいと思っている。

本最終報告書の構成は、目次に掲げるとおりである。

まず第I章において、研究目的と研究方法や研究スタイルを明らかにする。次に、第II章において、会計研究者に限らず広くわが国の女性研究者の現状が明らかにされる。これをうけて、第III章において、日本会計研究学会における女性会計研究者の現状を、そして、第IV章において海外の女性会計研究者の現状を明らかにする。ただし、第IV章は、日本会計研究学会と国際交流協定を締結している台湾会計学会と韓国会計学会を中心とし、その他アジア、ヨーロッパの主要国、さらにはアメリカを取り上げる。第V章から第VIII章が、

研究スタイルに基づく研究である。まず第V章において、歴史研究として、わが国女性会計研究者の先駆者ともいえる4人の研究者を取り上げ、文献研究とインタビュー調査を駆使し、それぞれの方の経歴、研究業績、さらにはその足跡をたどり、4人の方の会計学会や社会に対する貢献を明らかにする。第VI章と第VII章において、実証的研究に基づく分析結果を取り上げる。これまで本スタディ・グループは、会員に対し2回の質問票調査を実施した。第1回目は、2015年に女性会計研究者を対象に実施したものであり、この分析が第VI章にまとめられている。第2回目は、2016年に実施した日本会計研究学会の会員全員を対象とした質問票調査であり、これについては第VII章に記載されている。この2回にわたって行われた調査により、女性会計研究者のみならず男性会計研究者の研究に対する意識も明確にされる。第VIII章は、わが国女性会計研究者の著書や論文についての方法論等の分析に基づく理論的研究である。第1回目の質問票調査によって得られた女性会計研究者自らが代表的な論文や書物として掲げた著作224篇を対象として、その代表的著作を実際読み、その方法論、研究テーマ、さらにはキーワードについて分析し、女性会計研究者の特徴を明らかにしたものである。最後の第IX章は、本報告書のまとめであり、そこにおいて女性会計研究者の今後における課題が取り上げられる。

まさに本報告書は、集まった20人の女性研究者の汗と力（涙は見なかった）の結晶である。他にもまだこのチームに入りたくとも、人数制限により入れなかった方のご協力に心から感謝する次第である。

参考までに、それぞれのセクションの責任者（※印）と執筆者を以下に記しておく。

第I章	研究目的、研究方法と研究スタイル	
終章	わが国女性会計研究者の今後における課題	北村敬子※
第II章	わが国の女性研究者の現状—調査の視点と調査結果—	西村優子※
第III章	日本会計研究学会における女性研究者の現状	堀江優子※ 丸岡恵梨子
第IV章	海外の会計学会と女性会計研究者	阪智香※
補論	海外における女性会計研究者に関連する学術研究	高田知美
第V章	歴史研究	井原理代※ 兵頭和花子、澤登千恵、津村怜花
第VI章と第VII章	実証的研究	挽文子※ 田中優希、木村麻子、西村三保子、宮本京子
第VIII章	理論的研究	小津稚加子※ 挽文子、田中優希、佐々木郁子、宮本京子、石川恵子、阪智香、澤登千恵

なお、実証的研究については辻山栄子先生、理論的研究については山内暁先生に貴重なご助言を賜った。

章によっては量の多いものもあり、全部を読破する時間的余裕のない方がおられるかもしれない。その方は、章毎に序論と総括があるため、先ずはそれを読んでいただきたい。また、節には、原則としてはじめに番号なしで説明文が入っており、最後に小括としてまとめが書かれている。これも参考にしていきたい。

最後に、スタディ・グループとしての設置を認めていただいた当時の日本会計研究学会会長の伊藤邦雄先生、本研究の研究方法の確定にあたり、ご助言をいただいた先生方、インタビュー調査にご協力をいただいた先生方にお礼を申し上げるとともに、日本会計研究学会の事務局を務めていただいている森山書店の菅田直文社長のご尽力に感謝申し上げる次第である。さらに、実際にパソコンを操作して、統計処理をしていただいた岡田龍哉さん（一橋大学大学院商学研究科特任講師）ならびに最終報告書の作成にあたり形式の統一や校正に参加していただいた浅石梨沙さん（一橋大学大学院商学研究科博士後期課程1年）に、深く感謝申し上げる次第である。

2016年9月

スタディ・グループ主査

北村敬子

目次

I	研究目的、研究方法と研究スタイル	1
1	序論	1
2	本研究の目的	2
3	研究スタイルと研究調査手法	3
4	総括	5
II	わが国の女性研究者の現状—調査の視点と調査結果—	8
1	序論	8
2	研究者の人数および研究者に占める女性研究者比率	9
3	職場の視点からみた女性研究者の現状	11
4	研究の視点からみた女性研究者の現状	18
5	組織の政策・方針・戦略の決定過程あるいはガバナンスへの参画の状況	21
6	生活・家庭の視点	24
7	総括	25
III	日本会計研究学会における女性研究者の現状	34
1	序論	34
2	研究の視点からみた日本会計研究学会における女性研究者の現状	34
3	日本経済学会との比較調査	38
4	社会貢献の視点からみた日本会計研究学会における女性研究者の現状	46
5	総括	52
IV	海外の会計学会と女性会計研究者	55
1	序論	55
2	韓国会計学会・台湾会計学会における日本会計研究学会からの研究報告	57
3	日本会計研究学会の国際交流協定学会（KAA、TAA）における女性会計研究者	61
4	米州における女性会計研究者	66
5	西欧・東欧（旧共産圏）における女性会計研究者	72
6	アジア（韓国・台湾を除く）地域における女性会計研究者	77
7	その他の地域における女性会計研究者	87
8	国際学会（IAAER）における女性会計研究者	94
9	総括	94
補論	海外における女性会計研究者に関連する学術研究	96
V	歴史研究	106
1	序論	106
2	能勢信子先生の業績と足跡	109
3	眞野ユリ子先生の業績と足跡	152

4	山浦瑛子先生の業績と足跡	172
5	中川美佐子先生の業績と足跡	211
6	総括	246
VI	実証的研究 (1)	256
1	序論	256
2	先行研究のレビュー	258
3	第1回質問票の設計	265
4	第1回質問票調査実施概要	270
5	第1回質問票調査単純集計結果	279
6	研究者を志した動機を主軸とした分析	287
7	研究活動ならびに教育活動の促進要因・抑制要因を主軸とした分析	295
8	社会貢献活動を主軸とした分析	298
9	総括	301
VII	実証的研究 (2)	303
1	序論	303
2	第2回質問票の設計と質問票調査実施概要	303
3	単純集計結果	310
4	研究上の目標を主軸とした分析	322
5	留学を主軸とした分析	361
6	研究方法、情報源、および研究テーマを主軸とした分析	369
7	競争的資金の受給を主軸とした分析	386
8	総括	402
VIII	理論的研究	412
1	序論	412
2	財務会計領域における女性会計研究者の研究の特色	421
3	管理会計領域における女性会計研究者の研究の特色	431
4	監査領域における女性会計研究者の特色	436
5	環境会計領域における女性会計研究者の研究の特色	440
6	公会計領域における女性会計研究者の特色	445
7	税務会計領域における女性会計研究者の研究の特色	450
8	会計史領域における女性会計研究者の研究の特色	452
9	総括	459
終章	わが国女性会計研究者の今後における課題	463

I 研究目的、研究方法と研究スタイル

1 序論

日本会計研究学会 50 年史によると、はじめて女性会計研究者が登場したのは、1962 年に太田賞を受賞された能勢信子先生（入会は、1953 年）である。それ以後、「日本会計研究学会 60 年史—その後の 10 年—」では、状況が変わり、女性会計研究者の活躍が数件取り上げられている。そして、近年、日本会計研究学会の会員の中で女性の占める割合は、急激に増加しているように思われる。

それにもかかわらず、女性会計研究者の現状については正確に把握されていない。その人数、職位や常勤・非常勤の別、さらには専門分野や研究テーマ等について必ずしも知られていない。女性研究者の予備軍ともいえる大学院博士課程の在籍者についてはなおさらである。

また、女性会計研究者がはじめて学会誌に登場してから半世紀、その数が増えているとはいうものの、特別委員会やスタディ・グループに参加している女性研究者は、ごく少数に限られている。しかもその数少ない研究者が、いくつもの委員会やスタディ・グループのメンバーとなって活躍しているのが現状である。その意味で、まだまだ女性会計研究者たちの活躍は限定的であり、広く認識されていないように思われる。

国内外を問わず、女性会計研究者の研究に関する先行研究を見つけることは難しい。わずかに得た先行研究については、その取り上げ方が、われわれの意図するものとは異なっているため、第IV章の補論で取り上げている。

他方において、専門職である会計史の女性を研究対象とした代表的な先行研究としては、以下の 3 点をあげることができる。

- ① Educational Foundation of the Collage of the University of Houston の経済的支援を得て行われた Shari Wescott & Robert Seiler [1986]の研究 *Woman in the Accounting Profession*. (日本公認会計士協会近畿会女性会計士委員会訳『アメリカ女性会計士のあゆみ』1992 年)
- ② 日本公認会計士協会近畿会女性会計士委員会『翔け日本の女性会計士の歩み』2003 年
- ③ 日本公認会計士協会近畿会女性会計士委員会『女性会計士 20 人 人生の中間決算書』2014 年

このうちわれわれの研究が参考としたのは、①である。そこでは、文献研究とインタビュー調査に基づき、米国の女性公認会計士が社会的に評価されるようになる前から現在に至るまでの軌跡を多様な視点から分析している。現状に至る過程にはさまざまな困難があ